

歴史・伝統の三度の創り替え

——台湾 明延平郡王祠、開山神社を素材に——

中島 三千男

はじめに

一般に近代国民国家においては、国民統合を図るために、いわゆる「伝統の創造」(E・ホブズボーム「創られた伝統」)が行われ、またそれを可視化するために様々な記念碑や銅像、建物等が建てられる。

本稿は、明末清初(17世紀前期～中葉)の人で、明国福建出身の鄭芝龍と平戸藩士の田川七左衛門の娘との間に、平戸で生まれ、後、大陸に渡り「抗清復明」の戦いを起こすが、敗れて台湾に渡り、オランダ人(東インド会社)を駆逐し、台湾において最初の漢人政権を打ち立て、その意味で台湾の「開発始祖」として、今日に至るまで台湾・中国本土の漢民族の厚い崇拝を受けている、鄭成功(1624年～1662年)の祭祀施設(祠・廟・神社)を素材に、清朝政府、日本、そして国民党政府(中華民国)と台湾を領有してきた時々の政権が、国民国家(日本の場合には、帝国の形成・植民地支配)形成のために、鄭成功の事績に対してどのように読み替えを行い、またそのためにどのように、その祭祀施設(以下鄭成功廟と表記)の外観を変化させ、その機能を変化させ創り替えてきたのか、ということのエチュードである。⁽¹⁾

まず、はじめに以下の行論に必要な限りにおいて鄭成功およびその事績について触れておこう。

一 鄭成功とその事績

鄭成功は1624年7月14日(陽暦8月27日)に肥前国、平戸に生まれる(幼名田川福松)。父は福建省泉州府南安県石井郷出身の貿易商人・鄭芝龍で、母は平戸藩士の田川七左衛門(中国・台湾では田川

氏を中国人の翁氏の系統に位置付けていることが多い)の娘である。

鄭芝龍は1612年日本に渡来。平戸に居を構え平戸老一官と称す。海寇の巨頭として台湾、明国に往来して貿易に従事。1630年その海寇を平らげたる功により、明の都督となる。この年の10月、福松(数え年7歳)は、父の招請に応じ、明国に渡る。

1644年3月、李自成が北京を陥す。明の最後の皇帝(莊烈帝)は死没し明国滅亡。9月、先に建国していた清は李自成に替り、北京に遷都。残明(南明)勢力の一つ、莊烈帝の兄、朱由崧は金陵(南京)で即位改元し福王(弘光帝)政権を樹立するが、翌1645年5月には南京も清軍によって陥落され福王政権崩壊。その年の閏6月、今度は唐王朱聿鍵が福州で即位し唐王(隆武帝)政権が誕生した。この政権誕生に鄭芝龍ら鄭氏一族が深く関わった。8月、鄭成功はその隆武帝より明帝室の姓(国姓)である朱姓と成功の名を賜わり(以後、成功は国姓爺と称した)、隆武帝に侍す(22歳)。また、この年、母も大陸に渡り、安平の芝龍の下に寄る。1646年8月、清軍は福建に侵入、隆武帝も捕われ、唐王政権は壊滅する。父鄭芝龍は清に投降する意思を示し、成功らの諫めにもかかわらず11月福州に赴き投降、そのまま北京に連行される。同月、清軍は安平に侵攻、母は非業の死を遂げる。

父から独立した成功は1646年12月、同志数十人と「抗清復明」の旗揚げをし、厦門と金門島を拠点に鄭氏一族及び清軍との死闘を繰り広げながら、武装勢力集団としての頭角を現し、閩粵(びんえつ、福建省・広東省)沿海地方の諸州県を抑え勢力を広げていった。また、広西を拠点とする残明(南明)勢力の桂王朱由榔(永歴帝)政権の成立を知った成

功は直ちにその正朔を奉ずるとともに使いを送った。1650年代の前半、桂王は鄭成功を延平王に叙す（鄭成功の別称「明延平郡王」の由来、延平は福建省の地名）。成功はこの王の受封を契機に「六官制度」という政治制度を創設し、さらに拠点としていた廈門を思明州と改称し「国都」と定めた。

こうして足元を固めた鄭成功は、1658年5月に10数万の軍隊、数百艘の戦船を率いて、南京攻略のために北上。長江を遡上して翌年7月南京に到達、南京城を包囲した。しかし、清側の策略にかかり、清軍の急襲に雪崩を打って敗退、名将甘輝や張萬禮ら長年成功に従ってきた有力部下を多数失い、全軍は壊滅状況に陥った。9月初めに鄭成功は廈門に帰り着くが、大陸部に属する支配地のほとんどを失い、廈門・金門2島を中心に銅山（現福建省漳州市東山県）、南澳（なんおう、現広東省汕頭市南澳県）及びこれらに付属する小島しか保有していない状況は、追い打ちをかける清軍の攻勢をかわすには、極めて危うい状況であった。

そこで打たれた手が台湾への進出であった。台湾は当時、40年来のオランダ人（東インド会社）支配の下にあったが、1661年3月、鄭成功は総兵力2万5千人、300艘の船を率いて金門島を出帆し、4月サッカム（赤崁、現台南市）に上陸し、同年12月にかけてオランダ側の2つの砦、プロビンシア城とゼーランディア城を陥し、オランダ人（東インド会社）を台湾から駆逐した。

鄭成功は台湾上陸後、オランダ勢力との戦い（城の包囲）とともに、次々に新しい政策を打ち出し、台湾における初の漢人政権の基礎を打ち立てた。5月安平鎮（旧ゼーランディア町）に承天府を置き東都と定め、また天興県、万年県の2県を置いた。さらに法律制度の整備をすすめ、土地政策、租税政策、また「土民」（原住民）や「百姓」（漢族の先住民）対策にも手を付けた。

しかし、オランダ勢力を駆逐し、いよいよ本格的に漢人政権としての基盤を盤石なものにすべき1662年になって、鄭成功は急に心身の不調を来たし、ついに同年5月8日（陽暦6月23日）、39歳の若さで、その波乱に満ちた生涯を閉じる。隆武帝に

侍してから17年間、父の裏切りと母の自害に、その「抗清復明」の誓いを一層強くしてから16年間、死力を尽くしたが、ついにその鴻図を自らの力で実現することは出来なかった。

鄭成功の死後、その志を受け継いだのは子、鄭経である。鄭経は1681年1月に39歳の若さで亡くなるまで、18年と9か月間、よく台湾を維持するだけでなく、いわゆる「三藩の乱」に乗じて、自ら軍を率いて大陸に進出。一時は鄭成功以来かつてないほどの、福建省東南沿岸から広東省東北部にいたる大陸沿岸部を支配下に治めた。しかし、「三藩の乱」の終息とともに、清軍の圧迫を受け、1680年2月、大陸の土地だけではなく、沿海島嶼を含む澎湖島以西から総撤退することを余儀なくされた。

鄭経の死後は、経が中国大陸沿岸部を転戦している間、台湾にあって監国（王が地方巡幸の際、太子が都に留まり政治を代行すること）として業績も上げていた子の克塽が後を継ぐことになっていたが、一族の争いと部下の権力闘争の中で謀殺され（18歳）、結局次子・克塽が跡を継ぐ（1681年2月）。しかし、軍事的敗北と一族・部下の争いは清朝に抵抗する力を奪い、ついに1683年7月、克塽が清の軍門に降り、台湾鄭氏政権は3代23年で終わる。8月台湾は清の版図となった。

二 私廟（祠）としての「開山王廟」「開台聖王廟」

鄭成功の死去後、後の台南市内東安坊油行尾街に成功の王廟が作られ、住民の信仰も集めていたが、創立年代・経緯等詳しいことはわかっていない。台湾が清朝の治下に入ると、清朝政府の意向を憚って、住民は多くを語ることを忌避、廟の名前を「開山王廟」あるいは「開台聖王廟」（以下「開山王廟」と記する）とし、鄭成功を「開台聖王」と蔭称して祀っていた。清朝領有の17年後の1700年、康熙帝は鄭成功を「明室の遺臣に係り、朕の乱臣賊子に非らず」と、特に勅して鄭成功及びその子、経の両棺を故郷の中国福建省の南安に帰葬せしめ、廟を建てた。清朝政府は広大な領土を支配するために、急速

に漢化をすすめていったが、鄭成功の場合も、実際には「一」で見たように、清朝の逆賊であったが、明に最後まで「忠節」を尽くしたと、その「忠節」に着目してこのような措置を取ったのである。ちょうど日本の場合、戊辰の内乱下、会津の少年隊・白虎隊は新政府（官軍）に抵抗した逆賊として、遺体が放置されるなど、残酷な扱いを受けたが、明治国家が確立し、日本が帝国としての歩みを始める過程で、逆に主君（藩主松平容保）に「忠節」を尽くした例として、顕彰され、国定教科書にも登場するようになった例と類似のものである。

以後、「開山王廟」には鄭成功（開台聖王）の遺体は無くなったのであるが、清朝政府を気にせずに、祀ることが出来るようになったこともあって、鄭成功（開台聖王）の神像を安置して住民の信仰を益々集めていった。

一般に漢人の廟宇に対する関係をみると、一部落または数部落の者が共同して一合境、即ち一団となって、ある一廟神を奉じて境主、即ちその地の守護神と定めて崇敬し、一家一境の安全と災厄の回避を祈る習慣があった。「開山王廟」の場合もその所在地の油行尾街とその付近の5つの街の在住者が六合境と称する一団を組織し、「開山王廟」を境主と仰いで、その祭祀運営にあっていた。

また、1820年前後（清の道光年間）には鄭成功（開台聖王）を崇敬する祭祀団体、即ち心同敬、誠心敬、和心堂、忠雅堂、及び鄭氏裔族の組織する崇徳堂等も起こって、六合境と共に祭祀にあたった。その他、廟の修理費は地方一般より、また毎日の香油料並びに廟守の僧及び廟丁の齋糧などは僧の祈祷料や廟前に開設する果物市場の収入等に頼った。

主な祭りは毎年陰暦正月16日には鄭成功（開台聖王）が誕生した日として（実際は7月14日）、降誕祭を行い、また陰暦7月22日には王の為、普土祭（盆祭）を行うことを恒例にしていた。最も熱誠且つ敬虔の意を表して執行されるのが降誕祭であった。祭儀は六合境の者が交代にて臨時祭典薫事となって祭事を司り、費用は六合境各戸より寄付金を募った。

また、建物としては、1770年前後に、里人何燦な

るものが廟（祠）が荒廃していることを嘆き、同志を糾合して資金を集め、神殿を改築、且つ新たに拝殿並びに東西兩廂を増築、境内面積も125坪に拡大した。神殿には鄭成功（開台聖王）の神像を奉安、左右には鄭成功の「抗清復明」の戦いに早くから参加し、南京攻略の失敗においては身を以て鄭成功を救った名将甘輝、張萬禮の2将軍の像を配置した。その後、1845年暴風雨により神殿拝殿等、多大の損害を受けたが、府城（台南）の富戸により資金を集め、12月修復し、旧に復したという。

以上見たように、鄭成功を「開台聖王」として祀る「開山王廟」は台南の住民の私廟（祠）として、家や地域の災厄を守る、特に「水干災難」などを防ぐ、「現世利益」信仰の対象として住民の大きな尊崇を集めていたのである。

三 清朝政府による「明延平郡王祠」の創建 —最初の創り替え—

こうしたあり方に大きな変化があったのは1875年の清朝政府による、「明延平郡王祠」の創建である。前年の10月に、欽差大臣沈葆楨等は台湾に住む人々の願いを受けて、鄭成功は「明室の遺臣に係り朕の乱臣賊子に非らず」と先に述べた康熙帝の勅を引くと共に、台湾に対する貢献は非常に大きいとして、鄭成功に諡（おくりな）を追号するとともに、廟を勅建し、国家祀典に列し、春秋2祭を行うことを清朝政府（同治帝）に奏請。翌1875年1月、清朝政府（光緒帝）は「鄭成功は節に仗り義を守りて忠烈昭然たり、殊に水災旱魃に際し之れに祈れば、すなわち靈驗ありて、もつとも台郡に功あるものに属せり⁽²⁾」と聖旨を出して、鄭成功に「忠節」の諡を追号すると共に鄭成功の専祠を勅建し、国家の祀典に列し、春秋2祭を行うことを決定した。沈はこれに基づき「開山王廟」を改称して、その旧址に廟「明延平郡王祠」を新築し、社地も672坪と拡大した。ここに私廟（祠）としての「開山王廟」は、官廟としての「明延平郡王祠」に改変せしめられたのである。

以上が『県社開山神社沿革志』（以下『沿革志』と

略)による、「明延平郡王祠」創建の由来である。『沿革志』は後に述べる開山神社に関する基本史料であり、本稿も多くはこれに拠っている。従って、日本では、「明延平郡王祠」の創建に関しては以上のように語られてきた。しかし、この『沿革志』の清朝政府による「明延平郡王祠」の創建の記述には大事な事が隠蔽されている。この清朝政府による「明延平郡王祠」創建の意図を真に理解するには当時、19世紀半ばの東アジアの国際関係や廟の勅建を請願した中心人物である欽差大臣沈葆楨とは何者かを理解しなければならない⁽³⁾。

実は清朝政府に「明延平郡王祠」創建を奏請した沈葆楨とは、1874(明治7)年の日本による台湾出兵に対抗して、清朝政府から3000人の軍を率いて台湾に派遣された国防、外交の欽差大臣(清朝時代臨時に任命された高官。皇帝が直接に権限を与え、内乱の鎮圧や対外交渉など、特定の問題解決にあたらせた)であったのである。

当時の清朝は、太平天国の乱を鎮定し、「同治の中興」といわれる、恭親王や西太后(同治帝の母)をバックにした、漢人官僚、曾国藩や李鴻章、左宗棠等による近代化政策「洋務運動」(1860年頃～)が展開されている時期であった。そして、沈葆楨はアヘン戦争(1840年～42年)の引き金になったアヘン厳禁策をとった林則徐の女婿として、また福州に近代的造船所(福州造船所)を建設するなど洋務運動の先駆けをなした左宗棠に見いだされ、福州造船所の運営を任されて、清朝最初の海軍艦隊を創設したことにより、近代海軍の父といわれた人物であったのである。

1871年10月、台風の被害にあって台湾東南部八瑤湾(現屏東縣滿洲郷)に漂着した琉球・宮古島民が原住民・パイワン族によって殺害された(66名のうち54名、琉球・宮古島民殺害事件)。これに対して日本政府は清朝政府に対して責任を問うたが、清朝政府が台湾原住民は「化外の民」(王化の及ばない所の住民)として取り合わなかった。

これを口実にして、約3年後の1874年5月17日に西郷従道率いる日本兵3500人が長崎を出港、同22日台湾・屏東に上陸し付近を占領した。これが近

代日本最初の海外出兵である台湾出兵(清国側は牡丹社事件)といわれているものである。

これに対抗し、日本軍に圧力をかけるために、清国は同年5月、沈葆楨を国防及び外交の欽差大臣として3000名の兵士と、福州造船所で建造した戦艦隊を附して台湾に派遣した。沈の戦隊は屏東と台南の海域で、日本軍に圧力をかけると共に、9月、沈は安平に当代最新の洋式砲台(億戴金城)の建設に着手した(1876年完成)。この事件そのものは、その後の北京での外交交渉の結果、10月31日、駐清イギリス公使ウェードの調停により、日清両国間互換條款が結ばれ、清国は日本に対して白銀50万^{テール}両の事実上の償金を払う事で決着し、12月20日に日本軍が撤退して解決するが、沈が台湾住民の意を受けて、清朝政府に鄭成功の顕彰を奏上した10月はまさに日清両軍の対峙を背景に、北京での外交交渉が大詰めを迎えていた時期であった。

まさに、沈らの意図は「台民をして忠義の大いに為すべきことを知らしめば、勝国(鄭成功の台湾は清朝によって敗れた国・地域=筆者)と雖亦た必ず華衰の及ぶ所、風俗を励まし、人心を正しくするの道に於て、或は万一に裨けあらん⁽⁴⁾」と鄭成功の「忠烈大節」を宣揚することによって、「万一に裨けあらん」と住民の「民族大義」の心を振起し、日本の侵略に対峙するところにあつた⁽⁵⁾。

先に見たように、すでに清朝政府(康熙帝)は1700年に鄭成功を「明室の遺臣に係り、朕の乱臣賊子に非らず」と、その名誉を回復していたが、この措置はその時点では広大な領土を有する清朝の国内統治に向けてのものであった。しかし、今回の再評価は、近代化に足を踏み出そうとしていた清朝政府が日本を始め欧米列強(1840年から42年のアヘン戦争においても台湾は占領はされなかったが、イギリス艦隊との砲撃戦があった)に対峙するために、台湾住民の「民族大義」の振興、「国民」意識の形成を目的にしたものであった。まさに、この再評価及び、それを可視化するための「明延平郡王祠」の勅建は、清朝政府による鄭成功にまつわる「伝統の創造」であった。これが、鄭成功廟の最初の創り替えの意義であった。



写真1 明延平郡王祠の三川門
出典 辻子実『侵略神社』（新幹社、2003年9月）29頁

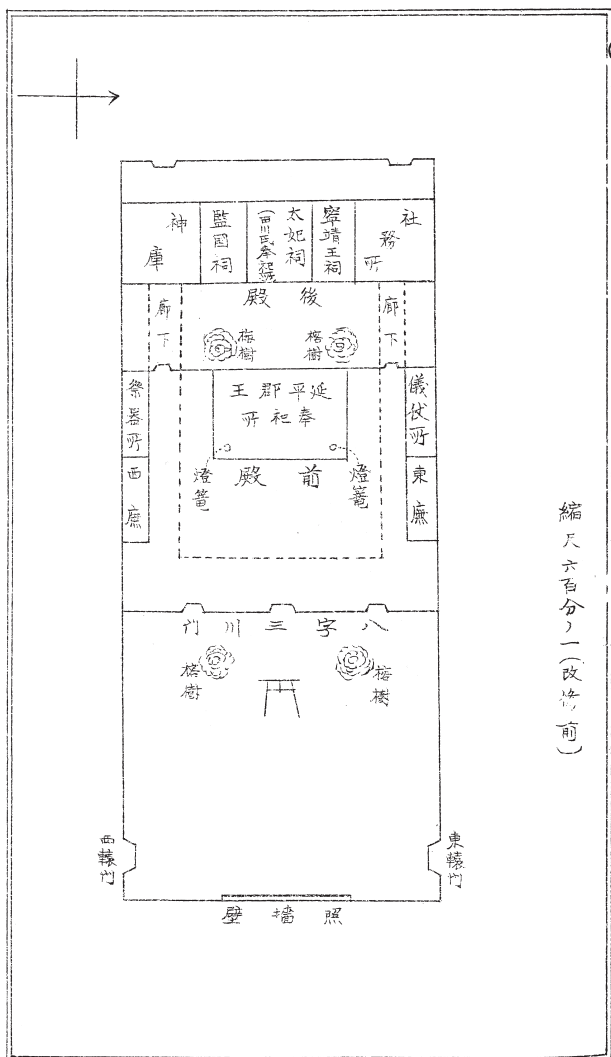


図1 1915年大改築前の県社開山神社（即ち当初の延平郡王祠）
出典 山田孝使『県社開山神社沿革志』の「県社開山神社沿革志附録」1頁。尚、鳥居、社務所等は開山神社に改変された以降のものである。

さて、このように勅建により、再構築された「明延平郡王祠」の結構等を見ておこう（写真1、図1参照）。八字三川門を入ると、まず神殿があり、延平郡王（鄭成功）を祀る前殿（本殿）があり、中庭を置

いて後殿には三つの祠が設けられていた。その左右には廊下が設けられ廡（廡）等が設けられていた。入り口の三川門には上部に「前無古人」の扁額、下部に1875年の光緒帝による「奉旨祀典」の石碑が置かれた。神殿は福州式の三進雙護龍主建築で、前殿には、「予諡忠節明賜姓延平郡王神位」が祀られた。また、鄭成功（開台聖王）の神像の左右に武将甘輝と張萬禮の像を配しているのは旧（「開山王廟」）のごとくである。後殿には3祠、真ん中に「太妃祠」、左側に「明寧靖王祠」、右側に「監国祠」を新しく配した。「祀典」的官廟には、後殿には父母の生育に感謝して「父母庁」という主神の父母を祭祀するのが一般的であるが、清に投降した父鄭芝龍は祀られず、「太妃祠」として清軍に抗して非業の死を遂げたとされる、鄭成功の母、田川氏の神位が祀られた。「明寧靖王祠」には寧靖王朱術桂と殉節の5妃の神位が祀られた。鄭政權が清朝に投降した際、台湾に客遇していた南明の王族には魯王世子朱桓他8王族がいたが、寧靖王朱術桂と5人の妃は投降を決定した時点で自縊した。「監国祠」には鄭成功の長孫監国鄭克塽及びその夫人陳氏（「一」で見たように、監国克塽が謀殺された後、遺体を引き取り絶食し、葬儀を終えたあと自ら命を絶った）の神位が祀られた。鄭成功の母・田川松といい、寧靖王とその5妃といい、さらには鄭克塽とその夫人といい、いずれも忠節を重んじ非業の死を遂げた霊が祀られたのである。さらに東西の両廡には「抗清復明」の戦いに鄭成功と生死を共にした諸将114人（左右の廡に各57名）の神位が新たに祀られていた。鄭成功だけではなく多くの諸将も祀られたところに、「民族大義」の振興、「国民意識」の形成という「明延平郡王祠」創建の意図が窺われる。

「明延平郡王祠」の祭儀は官費を中心として、毎年陰暦2月下旬、8月下旬の春秋両季において執行され、台湾府の文武各官が官服（制服）を着し、延平郡王神殿並びに太妃祠に対して礼拝を行った。こうした官祭とは別に、六合境並びに心同敬等の諸団体が陰暦の正月16日以後、数日間、降誕祭を執行して殷賑を極めたのは従来の如くである。

四 「開山神社」の創立 —二度目の創り替え—

清朝政府によって、まさに日本の侵略を防ぐために、台湾住民の「民族大義」の振興、「国民」意識を形成する目的を持って建てられた「明延平郡王祠」は、僅か22年にして、皮肉にも、日清戦争後、日本の統治を正当化する台湾の最初の神社・開山神社に改変される。これが、鄭成功廟の二度目の創り替えである。この開山神社については三つの時期に分けられる。

まず、第一期である。1896（明治29）年7月、台南県知事磯貝静蔵は鄭成功の忠烈と台湾経営の功績、並びに母親田川氏の貞烈を讃え、総督桂太郎に神社創設を建議した。これを受けて総督府は県社開山神社の創設を許可、翌1897年1月に鎮座した。ここに「明延平郡王祠」は県社開山神社と改称した。日本人の母親を持ち、日本の平戸で生まれた鄭成功は、日本人の台湾統治を正当化するシンボルに読み替えられたのである。

しかし、県社開山神社と改称されても、結構は「明延平郡王祠」を利用したため、神殿は福州式の三進雙護龍主建築といわれる、中国の伝統的な廟建築様式のままであったし、また何よりも前殿、後殿、両廂に祀られる神位は全く従前のままであった。変化といえば鳥居等が新しく付け加えられただけであった。ただ、外観は大きな変化はなかったが維持方法等には当然のことながら、県社としての体裁がとられた。

まず、氏子・信徒については台南庁一円を氏子となし（当時約12万戸）、信徒は台湾全土に亘った。また、これまで「明延平郡王祠」時代を含めて、僧侶を以て祭事を司らしめていたが、創立直後は「明延平郡王祠」時代の僧侶鄭福田を開山神社の神職に任命した。しかし1897年初冬に鄭は辞任、その後は台北台湾神社の禰宜齋藤正義が当社の社司を兼務、以後日本人神職がこれを務めた。また、神社には神職と共にそれを補佐して神社の運営にあたる氏子総代というものがある。「開山王廟」以来、この役割を果たしていたのが薫事といわれるものであった。県

社以前においては、これは必ずしも常置ではなかったが、開山神社の創設と共に、内地人、本島人（台湾人）各3名による薫事が置かれた。また、維持運営費として、その入場料収入が「開山王廟」以来大きな役割をはたしていた、社前の果物市場は境内の清浄を保つということで廃止された。祈祷料もなくなり、神職俸給、祭典費、神饌幣帛料及びその他の諸費は台南庁下一般官民の寄付金等によって支弁された。また言うまでもなく、祭祀は日本の神道式によって行われた。旧来民間において降誕祭を行っていた陰曆正月16日は、まさに陽曆2月15日に相当し、しかも2月は台南において1年の中でも寒暖適度にして、好時期の故を以て、2月15日を例祭日と定めた。祭儀は台南庁長以下諸員の参加の下、社司以下神職の手で行われ、例祭には総督府より祭祀費



写真2 神殿の前に新築された日本式拝殿
出典 松本暁美・謝森展『台湾懐旧』（創意力文化事業有限公司、1979年）246頁

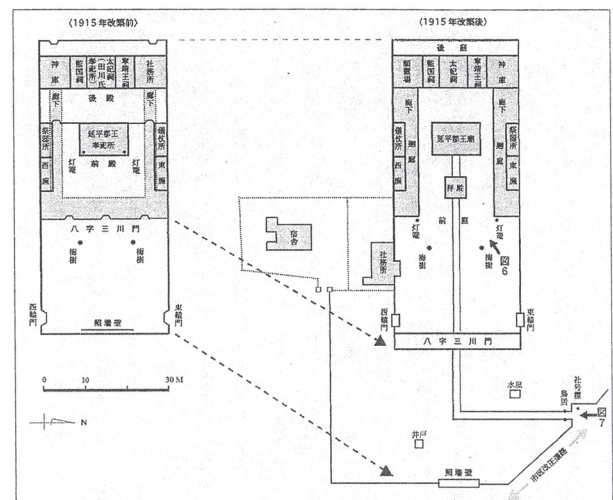


図2 1915年の改築前と後との比較
出典 青井哲人「対称軸の形成と移動—日本植民地の神社境内から—」（『アジア建築研究』INAX出版、1999年12月）120頁

が出た。他方、例祭等恒例の祭儀の他、六合境及び心同敬等の諸団体が数日間、降誕祭を行う民間の慣例は廃止されず続けられた。

二期目は1915（大正4）年の大改築後の開山神社である。1907（明治40）年11月、台南庁長に就任した津田毅一は台南の有志者より、開山神社の祠宇が傾廃したのを理由に、その改築の請願を受けた。これを受けて、津田は1908年5月に総督府に開山神社の改築の請願をした。7月に総督府の許可がおりたが、その後、台南庁長等の転勤等で計画は大幅に延びた。しかし、台湾全土より約3万6千円余りの寄付金を得て、1915年3月神殿上棟式を行い、5月8日、鄭成功の祥日（陰暦）に本殿遷座祭を行った。工事の様子を具体的にみると、神殿（前殿）、後殿、渡り廊下、東西の両廂、祭器庫、儀仗所は改築したもの、規模、構造、着色等全て前の様式を保存し、全く新築に関わるものは拝殿、社務所、手水舎、神職宿舍、（大）鳥居、歩道敷石、社号標などであった。また、照牆壁、八字三川門を大きく東にずらし、前庭を大きく広げた。この拡張を含め周囲を買収、社域の広さは従来の十数倍の9400坪と大幅に拡張された（写真2、図2参照）。特に新設した大鳥居、神殿（前殿）の前に設けられた日本式の拝殿は開山神社の廟から神社への景観を一步進めた。こうして開山神社は旧来の三進雙護龍主建築の「明延平郡王祠」（廟）と日本式神社の「合一」の建物となった。⁽⁶⁾

祭祀は1920年の地方制度の改正（州、市、街、庄制の実施）とも関連して、1923年に県社以下神社の整備がなされ、祭祀の純神道式の整備が進められた。また1914年4月以降は台南庁下の氏子に対し、神社の神像神符を配布し、その収入を以て、神社の諸費に充てるようになった。

恒例の祭祀の執行とは別に、例祭など大きな祭祀の場合、民間有志者により社域内に於いて盆栽、生け花、盆景等の陳列奉仕、余興としての角力、弓術の奉納の他、台湾式演戯、演武なども行われ、台湾人も多く参加した。また、陰暦3月の台南市の媽祖祭の時には、「開山王廟」時代から安置されていた開山神社の開台聖王（鄭成功）の神像を請出し、隊列

の先頭に安置して市内を練り歩いた。先に見た正月の降誕祭の継続と共に、この時期、廟と神社の「合一」の建物を象徴するように、開山神社は日本人官民と台湾人の「共祀」の雰囲気醸し出していた。

三期目は「廟」の神社化を一層推し進めた1941（昭和16）年の開山神社の新築である。台湾においても1930年代後半以降、皇民化政策の一環として、神社崇拝が強調され、「一街庄一神社」政策や神宮大麻の普及運動、神棚の設置の奨励（正庁改善運動）、在来寺廟の統廃合（「寺廟整理運動」＝台湾版廃仏毀釈運動、これは1941年頃に中止された）が進行したが、こうした背景のもと、また県社列格40周年を期に、さらに将来官国幣社への昇格に備えて、開山神社の建物新築が企図され、1936年奉賛会が組織された。州市の補助ならびに全島民の寄付及び中等学校

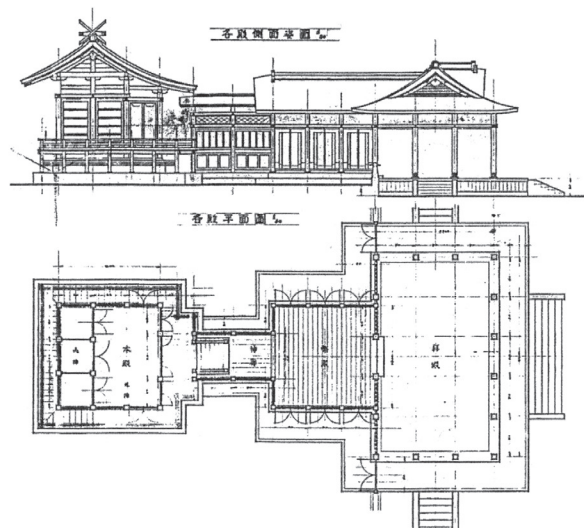


図3 「県社開山神社造営計画図」中の「各殿平面及各殿側面図」（原図・縮尺50分の1、京都・株式会社森本鋳金具製作所所蔵）
出典 菅浩二『日本統治下の海外神社』（弘文堂、2004年9月）224頁



写真3 新開山神社（『台湾日々新報』1941年4月23日）

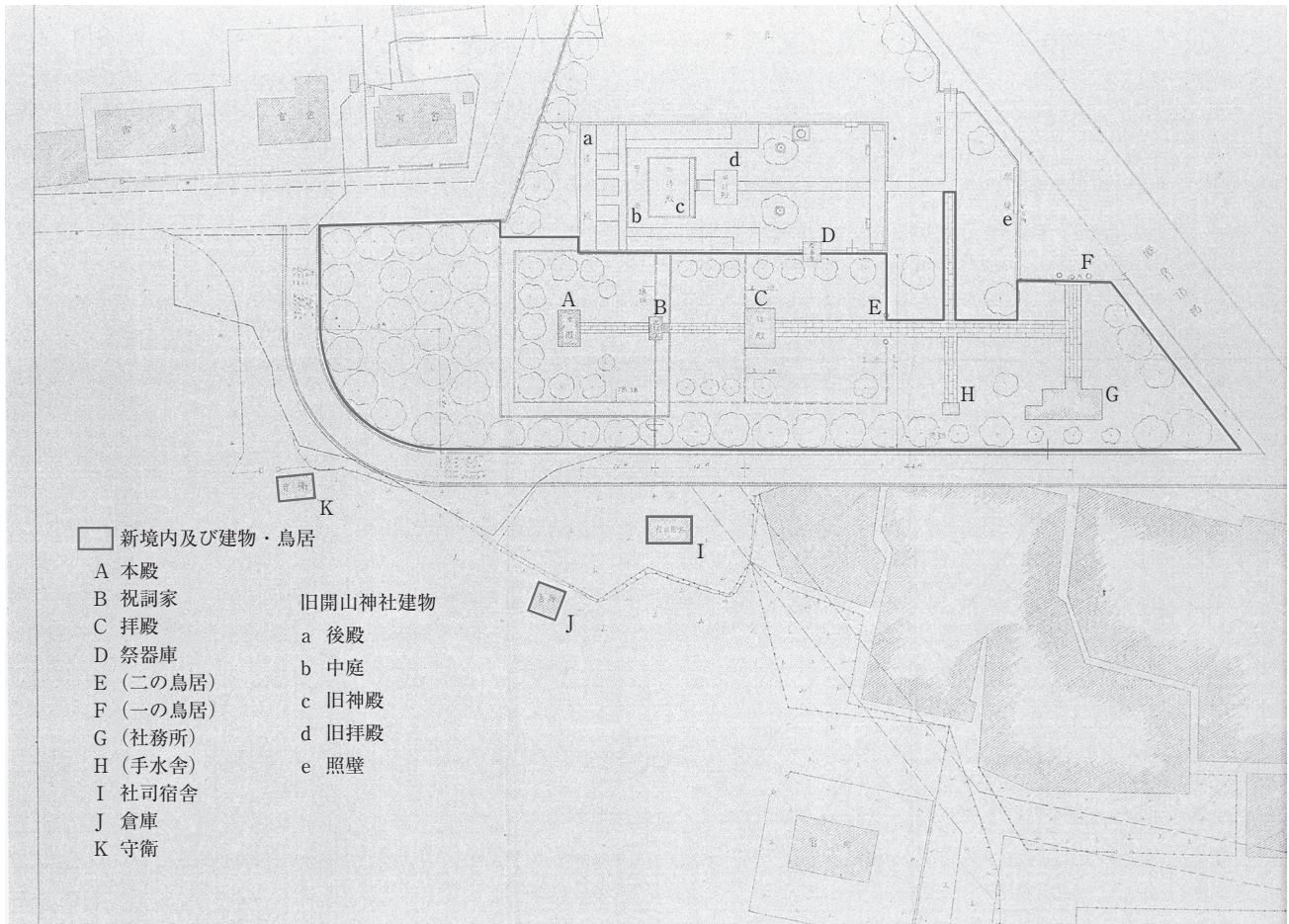


図4 開山神社造営計画図(原図・縮尺600分の1)

出典 総督府文書、1938年10月1日付「開山神社及び嘉義神社御造営奉賛会経費補助認可指令案」(黄士娟氏提供)の同図に筆者が書き加えたものである。大文字・小文字のアルファベット及び(二の鳥居)、(一の鳥居)等丸カッコ内の建物名は筆者が書き加えたものである。

男子生徒の勤労奉仕等により、1941年3月竣工、4月27日遷座祭を行った。新しい開山神社(以下新開山神社と表記)は従来の開山神社(旧明延平郡王祠)の境内の南側に隣接して、全く新しく建てられたもので、流造の本殿と幣殿・拝殿を神廊でつないだ純日本風の社殿であった(図3)。新社殿は当初、神明造りで本殿等社殿が一棟づつ一直線上に独立して並んでいるものを予定したようで、それを示すのが総督府文書、1938年10月1日付「開山神社及び嘉義神社御造営奉賛会経費補助認可指令案」中の開山神社造営計画図(縮尺600分の1)である(図4)。中心的な社殿(本殿、拝殿)の造りは大きく変わったが、他の付属の建物・構築物はほぼこの図面のようなものであったと推測される。写真3は『台湾日日新報』(1941年4月23日)が、「開山神社遷座祭/26日から奉納催物」と報じた記事の写真であるが、真ん中に、図4のF、一の鳥居(手前)とその左側(後方)にGの社務所、そして右側社号標の後方、左

側にE、二の鳥居がかすかに写っており、またその右側には流造の社殿の拝殿前景が写っている(新社殿は、C、Bのあたりに建てられたと推測される)。

他方、従来の開山神社(旧明延平郡王祠)の建物は破壊されず新開山神社に隣接する「記念物」(『台湾日々新報』1939年11月27日)として残された。

ここに、二期目の廟と神社の「合一」の建物をもつ開山神社ではなく、純日本式の「新開山神社」が出現したのである。

五 「明延平郡王祠」の復活 —三度目の創り替え—

1945年8月、日本の敗戦による台湾の植民地支配の終焉とともに、県社開山神社はその機能を停止し、1941年の新開山神社の創建とともに、単なる「記念物」として残された旧開山神社(旧明延平郡王祠)が、「明延平郡王祠」(以下「新明延平郡王祠」

と表記)として機能を回復し、復活する。これが三度目の創り替えである。この「新明延平郡王祠」の歩みは大きく2つの時期に分かれる。

一つは日本の敗戦、撤退直後から1950年代までの時期である。台湾を管轄下に納めた国民党政府(蒋介石政権、中華民国)は、日本統治時代の記念・功績を讃える建築物や神社等は社会救済あるいは公益事業用の施設に転用する事、奉安殿等は毀すか改装し、皇室の紋章等は切除すること、鳥居や燈籠は再利用して構わないが、日本統治時代の年号・名称等は切除すること等の政策を次々に打ち出していった⁽⁸⁾。

開山神社の場合、1947年に鳥居が再利用されて「新明延平郡王祠」の前に大きな華表が新たに設けられた。鳥居の笠の部分及び開山神社と書かれた額が取り外され(この笠の部分は今日でも後述の「鄭成功文物館」の脇に残されている)、代わりに国民党徽・青天白日徽と「忠肝義膽」と書かれた横書が掲げられた(写真4)。この「忠肝義膽」の横書は、1947年の国民党政府による台湾住民の虐殺事件である「2.28事件」の後、蒋介石から「來台宣撫」の



写真4 明延平郡王祠の華表。国民党徽(青天白日徽)と横書「忠肝義膽」が掲げられている(筆者撮影)。

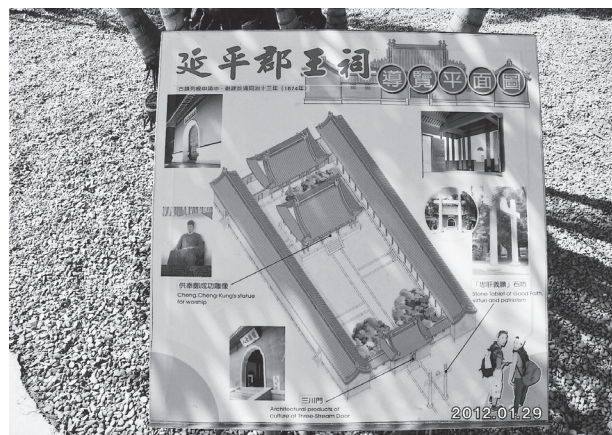


写真5 現在の明延平郡王祠平面図(祠の前にある案内板、筆者撮影)

任を帯びて南京より呼び寄せられた、白崇禧国防部長(国民革命軍一級上將で「小諸葛」の称を持つ、抗日の名將であり、また著名な作家白先勇の父親でもある)の手になるものである。

このように、「新明延平郡王祠」は、初期には新たに台湾の支配者となった国民党政府の統治の正統性を示すものとして利用された(鄭成功が台湾に上陸した日、4月29日を鄭成功光復台湾記念日とし、毎年政府から内政部長が出席して祭典が行われている)が、特に、国共内戦に敗れ台湾に撤退してきた1949年以降はそれとともに、台湾を拠点に「抗清復明」の旗を掲げ続けた鄭成功はまさに、国民党政府の大陸反攻のシンボルとして位置付けられた。

例えば、1950年6月11日付の『中央日報』には「延平郡王祠前／官兵歃血宣誓／各地駐軍紛紛立誓効忠」(歃=すす、飲む)という見出しの下に、次のような記事が載せられている。「政務官兵代表大会全体出席人員、10日午前11時半在延平郡王祠舉行効忠總統宣誓(中略)、於鄭成功像前交懸党国旗及總理遺像、像前供案奉有紅燭及果餅等(中略)、宣誓開始時首由監督人蔣經国主任就位、即由該部軍長劉仲荻歃血、用利刀殺鷄血酒於酒中、並宣讀誓詞(中略)。茲將誓詞錄下…[我憑良心對天宣誓、誠心誠意信仰三民主義、擁護蔣總統、服從命令…立志打回大陸、漸進北平城、活捉毛沢東、消滅共產匪賊…謹誓]」

鄭成功像の前で、血をすすって、大陸反攻の宣誓を行う姿は、鄭成功廟の三度目の読み替え、創り替えであった。

こうして「新明延平郡王祠」は1950年代まで、何回かの修復を加えられながらも、基本的には1875年に清朝政府によって建てられた「旧明延平郡王祠」の様式を保って利用され、ただ1946年に台南市より、正殿に彫刻師傅蔡心の手になる大きな延平郡王像（高さ6尺余）が贈られ、新たに安座しただけであった。

他方、1941年に建てられた、「新開山神社」の建物は先の「社会救済あるいは公益事業用の施設に転用する事」の指示通り、台南市東区公署及び民衆服務所等公共施設として利用され、1960年ごろまで存在した⁽⁹⁾。

二期目は「新明延平郡王祠」の建物が、1964年に新しく建て替えられた時期から、今日までの時期である。1960年代に入ると、台南の文化古都としての価値を見直し、反攻復国、民族精神・愛国精神の高揚のためにも中華文化を高揚し、併せて国際観光の対象として、台南の文化財、即ち孔子廟や「新明延平郡王祠」、さらには安平古堡や赤崁楼（プロビンシア城）、億載金城等を台湾省全体の問題として位置付けようという動きが始まった。こうした中で、1961年台南市は台南市民から寄付を募り、「民族英雄鄭成功史蹟重建委員会」を発足させた。新しい建物を設計したのは、大陸から台湾に渡ってきた、外省人（日本の敗戦後、国民党政府と共に台湾に渡ってきた人々）の成功大学教授、賀陳司である。彼は鄭成功の雄大さを表象するには従来の曲線の多い、地方的な福州の様式（三進雙護龍主建築）では不足であり、中央的な（北方の）「講求氣勢」な様式、北方宮殿建築を用いるべきだと主張した。これが現在建っている「新明延平郡王祠」である⁽¹⁰⁾（写真5）。また、この改建にともなって、「新明延平郡王祠」に安置されていた傅蔡心作の鄭成功像も、著名な彫刻家楊英風の塑像に替わった。これが今日見る鄭成功像である⁽¹¹⁾。

一方、1941年に新築された「新開山神社」の建物も、先に見たように、戦後、公共施設として利用されていたが、この時期に取り毀され、その跡地に明延平郡王祠の収蔵品を収納するための「台南市民族文物館」となり、さらに2003年に修築・整理が行

われ、今日の「鄭成功文物館」になった。

おわりに

以上みたように、歴史的には鄭成功を祀る私廟（祠）としての「開山王廟」が、1875年に日本の台湾出兵に対応して、台湾人の「民族大義」を振興し、「国民」意識を形成するための、清朝の国家的廟「明延平郡王祠」に改編される（「最初の創り替え」）。ところが、その「明延平郡王祠」は日清戦争後、台湾が日本の統治下に置かれると、鄭成功が日本人の血を引くことが最大限に利用されて、日本統治の正当性を象徴し、台湾の民心を収攬するための最初の神社・開山神社に改編される（「二度目の創り替え」）。しかし、これも、日本の敗戦後、台湾に入ってきた国民党政府による台湾統治と大陸反攻のシンボルとしての「新明延平郡王祠」として復活する（「三度目の創り替え」）。

17世紀の末に建てられた、鄭成功の祭祀施設（鄭成功廟）が台湾を統治する中国・日本の時々の政権によって国民国家の形成や帝国・植民地支配の形成のために、三度の「読み替え」、「創り替え」が行われて、今日に至っているのである。本稿は、以上の流れを素描するとともに、研究史的には「最初の創り替え」、つまり1875年の清朝政府による国家的祭祀施設・「明延平郡王祠」の創建とその意義（台湾出兵との関連）が、これまで日本では十分に位置付けられて来なかったことを浮き彫りにしようとしたものである。

尚、建造物的には以上で見たように、三度の創り替えが行われてきたのであるが、三度目の創り替えによってなった「新明延平郡王祠」は、今日においては国民党政権の台湾統治であるとか、大陸反攻のシンボルといった政治的意味合いよりも、台南の古い文化を象徴する文化財・観光資源の一つとしての性格を強めている。鄭成功の祭祀施設（鄭成功廟）の「四度目」の新しい機能とも言うべきものである。鄭成功の生地、日本の平戸においても1962年に「新明延平郡王祠」から鄭成功の神位の分霊を受けて、川内町の丸山に鄭成功廟が建てられ、平戸と

台南の交流が始まり、特に1980年代以降には相互訪問が積極的に行われるようになっていく。

※ 本稿は2012年12月15日に開催された、2012年度神奈川大学非文字資料研究センター第2回公開研究会「帝国後 海外神社跡地の景観変容—台湾の

事例を中心に—」での、筆者の報告「歴史・文化の三度の創り替え—台湾明延平郡王祠、開山神社を素材に—」をもとに原稿化したものであり、注記などは最低限にとどめた。なお、概要はすでにニューズレター『非文字資料研究』30号（2013年7月）に掲載している。

【注】

- (1) 本稿は王浩一『在廟口説書』の「延平郡王祠の身世」「億載金城の身世」の2つの叙述に多く負っている。特に前者の鄭成功廟の4つの時期区分（281頁）にヒントを得て書かれたものである。
- (2) 『県社開山神社沿革志』18頁
- (3) さすがに菅浩二はこの延平郡王祠の勅建について「明治4年の台湾原住民による琉球漂流民虐殺事件に端を発し、前年（1874・明治7年）の日本による台湾出兵・天津条約の締結（清朝が台湾について主権を正式に表明）に至る、琉球・台湾をめぐる清と日本との主権確定問題とも関係するであろう」と指摘している。（『日本統治下の海外神社』209～210頁）
- (4) 『県社開山神社沿革志』16頁
- (5) 前掲、『在廟口説書』277頁。尚、沈葆楨は、清国と日本の交渉において、強硬な態度を執ることを上奏文等で表明していた（白春岩「1874年の台湾出兵と清国の対応」、『社会学論集』17号、2011年3月）
- (6) 菅浩二は、開山神社の1915年の大改築においても、旧来の明延平郡王祠の姿が保持されたことについて、台湾神宮の宮司を永らく務めた、山口透の在来信仰、特に「祠廟」に対する敬意を熱心に説いた役割を高く評価している。そして、台湾における1930年代後半以降の皇民化政策の強化、開山神社でいえば後述する1941年の純日本式の新社殿の建築と山口の宮司の引退（1937年）および翌年の死は時期的に重なるとしている。（『台湾神宮宮司・山口透と寺廟』、ニューズレター『非文字資料研究』30号、2013年7月）
- (7) この、神明造りから流造りへの変更に関連して、黄士娟は台湾における「神社建築之風土化」の問題として、台湾神社の建設現場主任であった総督府技師八板志賀助が『台湾建築会誌』（第15輯第4号、1943年）に発表した論文に拠って、台湾の神社建築で流造りがなぜ適切なのか、その理由を紹介している。
 1. 神明造は伊勢皇大神宮に限定して用いるべきである。
 2. 神明造の社殿の特色は各社殿が境内の中に散在するところにあり、熱帯気候の台湾においては祭式や参拝上不都合が生じる。一方の流造は廻り廊下が本殿・祝詞殿・神饌殿及び祭祀に必要な各社殿をつなげ、風雨や炎暑にあっても恙無く祭典を執り行うことが可能である。
 3. 伊勢皇大神宮の神明造は杉・松などの針葉樹林と相調和し、非常に荘厳な雰囲気を作り出しているが、台湾の平地は主に広葉樹林であり、直線的よりも曲線的な社殿の方が背景と調和しやすい。（台湾中原大学建築学系硕士学位論文『日治時期台湾宗教政策下之神社建築』1998年7月、167頁の黄氏自身の日本語要約）
- (8) 林承緯・黄士娟『新北市立黄金博物館 金瓜石神社活性化再利用規畫研究案結案報告書』（国立台北芸術大学、2012年12月、237頁「付録2 戦後神社建築的保存脈絡」）
- (9) 黄士娟の御教示に拠る。
- (10) これにより、開山神社時代にも残されていた、明延平郡王祠の歴史的建築物としての価値が失われてしまったために、歴史家には評判は悪く、蔣政権の乱暴な政治的所産と見られている。したがってまた、国家（中華民国）の古蹟としては認定されていない。
- (11) 新延平郡王祠内に安座された、鄭成功の肖像（傅蔡心作、楊英風作）とは別に、もともと、開山神社時代を含めて、開山王廟時代から300年来の歴史を持つ、民間信仰の神像（開台聖王神像）があったが、光復後、肖像の安座や修復・改築の機会に、また蔣介石総統の不拝神像の影響もあって、いつの間にか「流離」の状況であったが、2007年になってようやく戻り、盛大な延平郡王回鑾大典が挙行された。

【参考文献・資料】

- 山田孝使『県社開山神社沿革志』（県社開山神社社務所、1915年4月）
 石原道博『国姓爺』（吉川弘文館・日本歴史学会編集・人物叢書新装版、1986年4月）
 林田芳雄『鄭氏台湾史—鄭成功三代の興亡実紀』（汲古選書37、汲古書院、2003年10月）
 毛利敏彦『台湾出兵』（中公新書、中央公論社、1996年）
 陳錚編『黄遵宪全集』下（中華書局、2005年）
 蔡錦堂『日本帝国主義下台湾の宗教政策』（同成社、1994年4月）
 青井哲人「対称軸の形成と移動—日本植民地の神社境内から—」（『アジア建築研究』、INAX出版、1999年12月）
 菅浩二『日本統治下の海外神社』（弘文堂、2004年9月）
 青井哲人『植民地神社と帝国日本』（吉川弘文館、2005年2月）
 王浩一『在廟口説書』（修訂版、心霊工房文化事業社、2008年12月）

『聯合報』『聯合晚報』『中央日報』『經濟日報』等の新聞資料、「台湾省参議会」档案資料（蔡錦堂氏提供）

【謝辞】

本稿作成にあたり、台南市在住の歴史家王浩一氏、国立台湾師範大学の蔡錦堂氏、国立台北芸術大学の黄士娟、林承緯の両氏、国立成功大学の陳玉女、顧盼の両氏、また、株式会社森本鋳金具製作所 4 代目御当主の森本安之助氏には資料の提供など、大変お世話になった。また、中国語の日本語訳には神奈川大学特別招聘教授馬興国氏、同大学院歴史民俗資料科学研究科の路平氏にお世話になった。厚く感謝申し上げる次第である。